

講演会・朗読会の報告

ヨゼフ・ヴィンクラー氏の朗読会を聴いて

小笠原 能仁

ヨゼフ・ヴィンクラー氏の朗読会は、2004年11月2日（火）午後6時から文学部第五会議室で行われました。

ズーアカンパ社のホームページ(http://www.suhrkamp.de/autoren/winkler/winkler_bio.htm)によれば、ヴィンクラー氏は1953年オーストリアのケルンテン州のカメリングに生まれ、商業高校を卒業後、1971年よりクラゲンフルト大学で事務職員として働くかたわら、ドイツ文学・哲学の講義を聴講します。1982年より文筆活動に専念することになりますが、1979年のインゲボルク・バッハマン賞受賞以来、オーストリア・ドイツ両国の文学賞と文学奨学金を総なめの感があり、2001年にはアルフレート・デープリン賞を受賞します。このような同氏の文学的成功について、ある評論家は「ヴィンクラー氏は自分の肉体を新しく適切な文学形式に適応させていくことができるからだ」と主張しています。（<http://www.literaturhaus.at/buch/buch/rez/jowinkler>）

同氏の朗読に先立って、早稲田大学文学部のエーバーハルト・シャイフェレ先生がヴィンクラー氏と2つの最新の小説 *Natura Morta* と *Wenn es so weit ist* について紹介し、ローマとベネチアがドイツ語圏の作家に、今なお物語の舞台と創作のインスピレーションを与え続けていることを解説しました。またヴィンクラー氏は農村生活を理想化する郷土小説家ではなく、緻密な物語手法を駆使して、農村の閉塞性やそこに生きる少年の内面性、そして残酷なほど強烈である体験を描き、新しい文学ジャンルを切り開いたことを説明しました。

その後ヴィンクラー氏が *Wenn es so weit ist* について、「この小説では、著者自身の故郷で起きた2人の兄弟の自殺が物語の題材で、息子が生き返る幻覚を母カタリーナが見ている場面を朗読します」と解説し、111ページから128ページを朗読しました。

小説の重要であると思われる箇所を翻訳します。

「15年以上もの長い間、彼女は願い続けた。17歳の息子が墓地の土の暑いダウンの掛け布団をまるでベットカバーのように払いのけて、よみがえることを。かたまりになって、多くの死者の匂いがする肥えた土を彼の青い背広から払いさることを。」Josef Winkler: *Wenn es soweit ist*, 2002, S. 114.

続いてヴィンクラー氏は *Natura Morta* の73ページから86ページを朗読しました。ローマの路上で交通事故死する美しい青年が題材です。

「彼の開かれた左目の長く湿ったまつげはまゆげに触れていた。彼の閉じられた右目の血に染まったまつげはそばかすに覆われた頬に触れていた。」 Josef Winkler: *Natura Morta*, 2001, S. 82.

朗読に引き続き質疑応答が行われました。討論はとても熱がこもったものとなり、直訳できない箇所が幾つもあるのですが、報告を試みます。

まず山本浩司先生から、ヴィンクラー氏が初作から扱った1976年に起きた2人の青年の自殺のテーマに関し、執筆の動機と背景について質問がありました。

その質問「なぜその自殺をそれほど悲しむのか？」に対して、ヴィンクラー氏は故郷の雪に閉ざされた幼少時代の経験を詳しく説明しました。そして最後に「わたしも2人と同じように自殺したかもしれない」と告白し、孤独な農村生活の苦しみを訴えていました。

その後多数の参加者から質問が出され、ヴィンクラー氏の答えをまとめると次のようになります。

自分の文学体験として、リルケの強い感受性に感銘を受け、「言語の美しさ」に感動し、ヘッベルの日記やカフカの小説を熟読しました。自分の創作では、メタファーが重要で、「映像を通して考える」(Bilderdenken)ことを心掛けています。またファンタジーを駆使し、言ってみれば「散文の絨毯」(Prosateppich)のようであることを目指すとのことでした。

朗読会の後、居酒屋〈かわうち〉でヴィンクラー氏と同郷のルプレヒター先生を交えて歓談が行われ、打ち解けた雰囲気の中で学部生が気軽にドイツ語を話せる良い機会となりました。

報告者自身「Wenn es so weit istにおいて、幻覚と現実描写を織りまぜる手法が、魔法のようで印象的です。なにか文学理論的な考えが根底にあるのですか？」という質問を朗読会の会場でしました。その場では、ヴィンクラー氏は「まったくない」と否定されたのですが、〈かわうち〉では「ある物語手法を応用した」と認めました。同氏は深い作詩論上の考えを持っているようなのですが、方法論にかんしてはあえて公言せず、文学作品の質で勝負している現代作家の緊張感がひしひしと伝わってきました。